研究

『佐伯の野球』昔語

賛助会員　山内武麒
（佐伯市山手五）

四

子供の頃、野球の試合があると何も彼も忘れて見に行つたものだ。球場は佐伯小学校の運動場にきまつていた。北の隅に便所があり、以前女学校が使用していた丸木側の二階建の校舎との間に土間の渡り廊下があつた。この渡り廊下の前がホームの位置になる。備えつけのバッタネットはないので、綿糸で編んだ広い網を二本の竹棹にくくりつけて張つて立て、その前にホームベースを置いていた。

小学校ではじまり盛んになつていた野球は、寺ら校内運動として行われ、学年対抗や白系対抗などで面白いゲームを見せていた。時たま郡内の他校チームと対抗試合をすることもあつた。明治四十二、三年頃から佐伯野球団という大人の野球チームが誕生した。この佐伯野球団は、当時の佐伯小学校の先生達に、東京などに遊学して夏休みに帰郷した学生が加つてつくつた急ごしらえの混成チームであつた。それで毎年年ごとにメンバーの顔ぶれが違つていたのである。この頃の小学校の男の先生は殆んどみんな野球をやり、しかも上手な人ばかりであつた。浮かんでくる人達の顔ぶれは、先生方では、山県治夫先生、野村越三先生、仲矢郁先生、仲矢文先生、今泉作次先生、水野道弟先生、小野春夫先生などで、学生では、阿南卓先生、山崎元邦先生（歯科医であつた）は忘れられない。

明治四十三年の夏、暑中休暇中のことであつたと記憶している。臼杵野球団が遠征して来てわが佐伯野球団と試合したことがある。球場は佐伯小学校の校庭であつた。この試合は佐伯で行われた最初の対外試合であつたと思う。その頃臼杵には県立臼杵中学校があつたが、臼杵チームには中学生は加わらずやつぱり学校の先生と帰郷中の学生とでつくつた混成チームであつたようだ。今憶い出しても可笑しいことであるが、選手たちの着ていたユニホームは今のようなものとは全くちがい、上着は立襟のついた半袖シャツ、下着は膝下まである長いもので前側半分には綿が布かき入れて二重にも三重にも雑巾さしたように縫い合せて厚くしてあつた。これはスライディングへその頃はすべりこみといつていたしをしても怪我を防ぐためだといつていた。それでも胸にはちゃんとエスのマークをつけており、帽子には二本の黒線が入れてあつた。野球靴はまだないときであつたから、ズックの運動靴か足袋はだしであつたのであろう。その頃の審判はマウンドの投手の後に立つて塁審をつけずに一人でやつていたのである。佐伯チームのピッチャーは山県治夫先生、キャッチャーは野村越三先生だつたと記憶している。野手にはグローブをしないでミットを使つていた人があつたように覚えている。

試合の経過もスコアーも覚えていないが佐伯野球団が勝つたのである。私どもは飛び上つて喜んだものだ。その頃はまだ鉄道が開通していなかつたので、臼杵チームは汽船で来て宿屋に一泊して試合に出たのである。臼杵野球団はこの試合に負けて全員が頭をれ坊主にして帰つ

たことを覚えている。なおこの臼杵チームの選手の中にその当時まだ学生であったが、後に眼科のお医者で、我が国で初めて角膜移植手術に成功した有名な緒方清弟博士がおられたことを後になって知った。

この試合について菅一郎先生は次のように書かれている。

この野球試合で、臼杵軍は負けた晩は、梅屋旅館（筆者注、菅先生の実家）に泊っていた。一人づつ居らぬようになって、九坊主になって帰ったのが頻かむ生で宿に帰って来た。二三人がはじまりで、後は我も我もと一同坊主になって帰って来た。全員酒を呑んで、臼杵の盆踊りへ市のマサキぬんもあったし唄でおどけて踊った。一郎、町内にて揃う踊り歌がより皆が踊れることを幼心に羨ましく思うた。緒方清躬氏以外に、後に佐伯に養子に来た安部潤一氏（旧姓西水、池田佐伯市長夫人の父君も居った。

その翌年のことであった。やはり夏の休暇中であった。今度は佐伯野球団が臼杵へ遠征したのである。私は小学校の五年生であったが、夏休みではあるし、臼杵に親類の家があったので、兄に連れられて応援に行った。汽船で行くので前日から出掛けて選手達は皆んな宿についた。私どもは親類の家に泊って翌日の野球試合の応援をすることにした。いよいよ試合の当日、私ども応援団は——といっても僅か十五、六名だったが——球場に行く前に、臼杵城址（今の臼杵公園）に行って応援の練習をして、意気揚々と球場の臼杵中学校グラウンドに乗り込んだのである。所定の席について今やおそしと試合の始まるのを待っていたが中々はじまらない。何か問着が起っているらしい。両軍の選手は試合前の練習も型通りすんで、ベンチでひかえているのに試合は始まらない。相当長い時間がかかったのに揉めごとはおさまらず、とうとう佐伯軍は引き上げてしまったのである。今で言えば放棄試合であろう。後で聞くと審判員の問題で、どちらから審判員を出すかで揉め、話しがつかずにとうとう宣告別れになってしまって試合は行われなかった。この事件のためか佐伯と臼杵との試合は断絶し、ずっと後、佐伯、臼杵両中学校の対抗試合や、少年野球戦が行われるようになるまで相当長い間試合は行われなかったようである。

五

明治四十四年に佐伯中学校が創立して間もなく同校野球部が生れた。河南卓先生の指導監督の下に練習に励み、大正二年には大分市へ遠征して大分師範、大分中学と対戦して連勝して帰ったことがある。この時の選手に、広末草美氏、矢田秀三氏、河南衛氏、山名常明氏などが居られたことを記憶している。

佐伯中学校の野球がいよいよ盛んになったのは大正八、九年頃で、大正八年の夏に延岡中学を迎え好試合を展開して見事勝ったことがある。その時の佐伯チームの投手は前佐伯市助役花崎敏明氏であり、延岡チームの投手は佐伯出身の吉田美稲吉氏（後に津久見市の石井家へ養子となる）であった。どちらも名投手で鳴らした人たちで、二人の投げ合いは満場のファンを沸かしたものであった。

この頃から毎年夏になると、早稲田大学の現役選手をコーチに招き、佐中チームの野球部は合宿して猛練習を受けていた。また、この頃には海軍の聯合艦隊が毎年夏になると艦隊訓練のため佐伯湾に集結していたが、この

艦隊の野球チームが上陸して来て佐中チームと練習試合をしていた。海軍兵学校出身の猛者揃いのこの艦隊チームはその技倆は拙くとも、勇猛果敢なプレー振りを発揮して見ごたえある好試合を展開していた。この時分から佐中チームには名選手が次々とあらわれたが、昭和の初め怪腕投手古川三郎（現在河内と改名）氏が出て、向う処に敵なく遂に九州中等学校野球大会に優勝し、佐伯中学校野球部の黄金時代をつくった。

六

校内体育として取り入れられ盛んになっていった小学校の学童野球は、スポンヂボールの出廻るに随って全国的に勃興した少年野球に刺戟されて益々盛んになった。大正九年に大分新聞社（現在の大分合同新聞社）が主催して東九州少年野球大会が大分市で開催されるようになり、佐伯小学校チームは第一回大会から毎年出場し對外的に活躍する機会に恵まれた。A組即ち高等科チームは第一回、第三回、第四回とこの大会に出場して優勝し、大正十四年には B組（尋常科チーム）が出場して大分市第一小学（現在の金池校）チームを破って優勝した。この チームはその年から始まった全国大会に出場する権利を得て、その夏宝塚市で挙行された全国少年野球大会に出場して善戦健闘したのである。これは前代未聞の壮挙事で、佐伯から出た野球チームで全国大会に駒を進めたのはこの チームだけで、今までにも先にもない。私はこの チームをコーチした一人である。大正十四年四月に蒲江小学校から佐伯小学校に転任して六年男子の担任を命じられた。赴任した日から同僚の水矢正木君と早速この チームのコーチを引受けることになり、雨の日も風の日も休まずに猛練習に励んだのである。この チームは五年生の時から吉田格（吉田美稲吉氏の実弟）氏の薫陶を得て野球が上手で、小粒ながら強い チームであった。就中、挟間誠君（当時の佐伯高等女学校長挟間俊雄先生の令息）は稀に見る名投手で、殊にカーブ投げが得意で、同君の投げるドロップは鋭く曲り中々打たせなかった。大分の大会で大分第一小学チームと対戦したときは中々の苦戦で、一対一のまま補回戦に入り、十一回に一選手（十番手か川野一生君だったと憶う）が無謀とも思われるホームスチールを敢行して一点きりにして勝った。

全国大会への出場権を得てからの練習は格別なもので、阿南卓先生の監督の下に、時の校長高妻弘道先生を初め、全校の先生の激励を浴びて毎日日の暮れるまで練習に励んだ。私はこの練習が祟ったためか大会へ出発の一週間程ど前に突然頻尿神経まひに罹り、とうとう選手について行けないことになってしまった。

全国大会では福島市の福島第一小学チームと戦い善戦したが、戦に利なく第一回戦で破れたのであった。このことは私にとって忘れ難い憶い出の一つである。

この東九州少年野球大会はずっと後まで続いて行われたが、其の後佐伯小学チームは優勝の機会に恵まれなかった。

昭和二年、阿南先生の提唱で南海部郡少年野球聯盟が結成され、南部の小学校に野球チームが出来て夏の炎天下でリーグ戦が行われた。この為少年野球熱は旺盛になりその技術は益々向上して、昔、野球で県下に名を挙げた上浮小学校（昔の小倉高等小学校）のA組チームは東九州大会で優勝し、東京で開催された全国大会に出場したことがある。

七

大正末期から昭和六、七年頃にかけて、軟式野球が大流行して野球熱はいやが上にも高まり、町内の青年団や各職場職域には野球チームが生まれ、毎年色々な野球大会が催されていた。野球好きの多い佐伯市民は老も若きも「野球、野球」で明け暮れし、まさに「野球王国佐伯」といっても決して過言ではなかった。この当時、佐伯小学校の職員チームは優秀な選手が揃い、時の校頭出納菊二郎先生が監督で、今井利氏が主将となって福岡市春日原球場で挙行された九州社会人軟式野球大会に出場して見事優勝したのである。まことに当時に於ける一大壮挙であった。その時のバッテリーは平川清氏（現佐伯東小学校長）と吉田秀雄氏（前鶴岡小学校長）で、野手は山崎、吉良、野々下、大田和、金田、池田などの諸氏であったと記憶している。

佐伯の野球が小学校に始まり、中学校でそのわざが磨かれ、更に社会体育の中心となって、町を挙げて野球を愛好する気風が醸成されたのは、先輩の人達がいち早く野球を学校体育の中に取り入れ、熱心に指導し啓発に努められたことによるが、就中、阿南卓先生の努力のおかげである。先生は新しい野球を次々と紹介され、佐中チームの監督指導から少年野球の普通発展に献身努力されたことを忘れてはならない。先生は佐伯の野球の育ての親であるばかりでなく、大分県下に於ける野球の先覚者で、戦前大分合同新聞社が主催して毎年行われていた東九州少年野球大会の際には、審判委員長としてその運営にあたっておられた。

八

戦後学制の改革により新制中学校が設けられ、従来の中等学校は高等学校となった。鶴谷中学校をはじめ、佐伯市、南海部郡の各中学校には開校当初から野球部が誕生し、よい指導者の熱心なコーチの下に部員の真摯な努力が続けられ、県体育大会及び大分合同新聞社主催の野球大会、また各ブロック別野球大会等に出場して優秀な成績を挙げている。その中でも鶴谷中学校は特に秀いで、これらの大会で幾回も栄えある優勝をかち得ている。まさに佐伯野球の伝統が立派に生かされているというべきであろう。

戦前の佐伯中学校は鶴城高等学校となり、野球部はそのまま引き継がれて今なお健在である。これまでの長い歴史の中には幾多の強い チームが結成されて、県下はおろか全九州に覇を唱え名門鶴城の名を輝かし、多くの名選手が輩出して伝統ある野球部としてその名声は高いが、未だに甲子園の土を踏む機会に恵まれないことは甚だ残念である。鶴城高校だけでなく、豊南、佐伯の両高校の野球部もめきめき腕をあげているが、七十余年の歴史を持つ佐伯野球の伝統を受け継いで、より一層の精進と努力を重ねて天下にその名声を挙げて欲しいものだと心から願うものである。

年毎に野球は益々普及して猫も杓子も野球に熱中している。しかし野球の発祥地として自他ともにゆるしていた佐伯の野球の株は、近来大分市や津久見市に奪われてしまった感がある。戦後はその傾向が益々強くなった。過ぐる大分国体の際に、時の出納市長の大英断によって建設された佐伯球場は、佐伯くらいの小都市には勿体

過ぎる頃ど立派な球場である。この球場が出来たおかげで、佐伯の野球熱が一段と燃え上がりつつあることは甚だよろこばしいことである。この球場がよりよく有効に活用されて「野球王国佐伯」の名を復活し、より一層の発展を祈って止まないものである。

（終）

研究

佐伯と国木田独歩（五）

臼坪・五所明神のあたり

山本　保
（会員・佐伯市池船在住）

独歩の作品「潔の半生」の一部を紹介いたします。

（坂本邸）家を出で、左に折れ、養願寺（養賢寺、禅宗）の門前を過ぎて、直に野分に進む一路、右に溝あり、左は水田なり。

此の一路達して窮まる処は家数七十四、五に満たぬ。蟹田と申す字。

また其の家々に及ぶ処、一座の森左に在りて、程に社（五所明神）あり、前に石の鳥居あり、石燈籠あり、大なる石橋溝にかかり、溝は此の辺に至りては甚だ広く水をたたへ、潮満つる時は小さき湖を形づくる。

さて此の一路は好及てなす散歩の筋なり。秋ならば紅葉、溝の両岸に並び、枝と枝と相接して溝を掩ひ、紅葉、水に映り、水、蒼空と映じ甚だ美観を備ふ。人の家に遠く、何かの黙想をこゝ、あちらこちらと行ききして試みるに甚だ適へる処なり。

此の路を左に別れて二条あり。一は静けき谷に導き、一は一個の村に導く。村を臼坪と呼ぶ。此の路より眺むる時は佐伯より一世界を別つて作るが如し。山の麓にあり、村の背は直ちに小さき谷なり。右も山、左も山、前は水田、即ち此の路の右の田なり。此の道と行けば村人の声かすかに聞ゆ。子供の呼ぶ声明かに聞ゆ。

雨降りたる夜の冬の朝、風なく、なまめかくき沈静の朝、白雲（ハクウン）元越山の谷をうづむ。

臼坪村の朝煙しめりて高く上り得ず、後の谷にこんもりとたなびき、黒く湿ふ藁屋より青き煙ゆるやかに上りて村の上を掩ふ。（注一）綿うつ弦の音、例の如く聞ゆれども今朝は湿りてきこえ、微処に一人、二人、彼処の堤の上を二人、三人、村人の行きかふを見る。

老松の馬場（馬場通り）の松が枝より墜つる雫は昨夜の雨のなごりなり。田の畦、蘆の枝、をちこちの鳥群なげに鳴く、さすがに冬の朝なり。砂鷺（注二）つく場所に近づけば、若者の小屋うちに唱ふ声聞ゆ。少女等の笑ふ声聞ゆ。牛の鼻息聞ゆ。

蟹田の鍛工（かじやこ）の前を過ぐれば、鉄槌の音已（すで）に朝の雲にひびく。

（注一）綿は各家で自家製造していたものと思われます。

（注二）当時、サトウキビも栽培していたものと思われます。現在沖縄の二月はサトウキビの刈り入れの最盛期にはいります。二、三尺余りに伸びた幹の先には、ススキの穂そっくりの真っ白い花が咲き乱れます。明治二十六、七年頃、佐伯の農家ではサトウキビか